

「姥捨て山」考

良いお客様に恵まれているな～と日々実感している高野です。

この仕事の最大のメリットは業種、年齢、性別を問わず様々な方と接点を持てるので、色々な専門家の話を聞くことができるところにあります。

昨年、春から母を同居して介護を始めるにあたっては、沢山の介護関係者の方のご意見をいただきました。中でも 20 年超お付き合いくださっている I さんは、ベテランのケアマネさん。介護される側だけでなく、介護する側の心のケアも流石で、「介護が苦しくなったら、遠慮せずに施設に助けてもらったら良いですよ」と言ってもらえ、凄く気が楽になったものです。

その方に「自宅介護の限界は？」と訊くと、「睡眠不足になったら、仕事に悪影響が出たら、家族間の不和が起きは始めたら、施設にお願いするタイミングですね」と事前に言ってもらえたのはとても有難いことでした。

正直、昨年 5 月から同居を始めて、ものの 3 日もしないうちに睡眠と仕事には影響するなと直感しました。同居当初、一晩に 3 回起きてトイレを探す母。基本、夜中のトイレ探しは私に対応したので、朝起きはほとんど出来なくなってしまいました。

幸いだったのは家内が甲斐甲斐しく面倒を見てくれたことでした。言い訳に聞こえるかもしれませんが、息子が母親の介護をする限界のようなものも感じました。

この 1 年半で 2 回もコロナにかかり、今年になっては転倒が相次ぎ骨折も。歩く力が弱まったことからグループホームへの入居を決めたのですが、私の心の中は、「姥捨て山」に親を捨てるような感じもして、なかなか踏み切れませんでした。

また、そんな時に限って次のような文章を目にするのです。

『「日本民俗学の父」と呼ばれた柳田国男の随筆に、「親棄山」という戦時中に執筆された作品があります。(中略)

ある男が六十歳になった親を畚(もっこ)に入れ、幼い息子に片棒をかつがせて、山の奥へ棄てに行くという話。親を山へ置いた後、男は用済みになった畚もそこに置いて帰ろうとしますが、息子が「これは家へ持って帰りましょう。いずれまた必要になるから」と言います。その言葉に我に返った男は、親を連れ帰ったという話です。』

この文章が、今もずっと、頭を離れません。2000 日以上続けている母への一日通信は、これからも継続します。夫婦でいくつもの施設を、何度も見て、面会の自由度の高いグループホームを選びました。

グループホームを姥捨て山にするもしないも自分。面会の実践をしていきます。